

奇しき運命の転機

ラバウルから生還

愛知県 奥村 昇

私は昭和十七年四月十日、福知山歩兵第一三五連隊歩兵砲中隊に教育召集の目的のために入隊しました。大正十年五月七日名古屋で生れたのですから、入隊は現役とほとんど一緒でした。

厳しい訓練が毎日続き、夜は夜で野戦帰りの古兵が、なんらかの理由を付けて「弛んでいる」と総ビンタ、対抗ビンタなどいろいろやらされました。また、驚の谷渡りなど、寝台の手摺りにつかまり、次の寝台へ渡る。体重を腕で支えての連続で「ホーホケキョ」など鳴き声までして、家の人には見せられぬ姿でした。

これが軍人魂を鍛える方法とか言われておりましたが、古兵の人によって違い、教育のための人と、個人的なもの、あるいは家に帰れない腹いせや、自己願

示したいのもいたのです。しかし、その後の苦しい戦場での経験、終戦直後の物資の乏しい生活において、耐えることができたのは、この初年兵時代の屈辱に耐え得た試験克服のお陰ではないかと思っております。

訓練が続いた二か月目の六月七日に、私は訓練中に負傷し、十一日右第八肋骨々折の疑いによって福知山陸軍病院に入院いたしました。これが原因で七月八日教育召集解除、事故退院となり帰郷させられました。残った人たちは結局中支へ行きました。私は負傷兵ということで解除になった、第一回の運命の変わり目です。

解除の翌年、昭和十八年十月二十八日臨時召集を受け、同年十一月二日中部第二部隊に入隊、八日ガダルカナル撤退、生き残りの歩兵第二二八連隊（沼第八九二四）要員とし名古屋を出発しました。九日、宇品港を出航、一万トン級の貨物船で十日目の十八日に「カロリン群島パラオ島」に上陸しました。

召集から入隊して宇品出航まで十一日間、非常に短期間だった原因は、十月二十日過ぎに動員があり、十

一月八日頃入隊の部隊編成はビルマ派遣要員といわれ、我々はビルマ要員の籤はずれでした。しかし、後で聞いた話ですが、その部隊はビルマに行かず、サイパンへ行ってしまったのです。したがって私の中隊長や大隊長など全部（第四十三師団）玉碎してしまいました。これが第二の運命というか命拾いということです。

この動員の直後に沼浜団（第三十八師団）から、ガダルカナル島転進部隊の欠員の補充要求が来たため、急遽手を打たれた変則的な処置であった模様です。部隊を出発する際に我々に送られた言葉は「君達はいくじ逃れで助かったと思つたらうが、蒲鉾の材料（鮫に喰われ）になるため出掛けるようなもので、気の毒だ」。輸送船は撃沈されるといわれ、運が無いなあと諦めたのです。

この当時はまだパラオ島内では全然戦争の危険は感じられなかった。島と島との間の水道を鯉の群が泳ぐ様が目の当り見られ、食事はこの鯉の刺身・煮付けが出て美味かったが、この様な日が毎日続いて、喰い飽き鯉料理も程々にと、後で考えてみれば贅沢な想い出

があります。消灯後、初年兵でありながら、宿舎を抜け出して原住民の建物に遊びに出掛けたこともありました。

上陸して一か月後の十二月十七日、一・五トン程度の小さな貨物船数隻に分乗して、それに輪をかけたような小さな駆潜艇数隻に護衛されて「ニューブリテン島ラバウル」に向け密かに出港しました。

この一か月間、港を出る輸送船がほとんどパラオ港外で米国潜水艦によって撃沈というより轟沈されており、その惨状がパラオ島から望見出来たといわれておりました。我々の船団が出港する前日敵のスパイが島内で発見され、無線発信傍受が封鎖されたため、難なく出港出来、目的地に向かって航海が出来ることとなりました。これが第三の運命の転換で、思えば身のものもよだつような状況でありました。

パラオまでは一万トン級の豪華な船旅（戦時下としては）とはまるで違った。我々は独立歩兵大隊を作つたのだから人数は先に申したとおり少なく、船倉に座れる程度の高さの蚕棚式のを何段も組み立て、そ

の中に詰めるだけ詰め込み收容された状況でした。

便所は甲板の外側に木枠を組んで取り付けられており、あの荒海で木の葉の様に揺れ動く甲板に出るのも一仕事で死ぬ思いです。船倉では彼方此方で嘔吐する者続出、その悪臭は船倉に充満、食事を取る者も少なく目を覆う有様です。

航海中は駆潜艇数隻護衛というが、何処にいるのか判らない荒波・高波の間にいるだろうが、敵機の攻撃の時は雲か霞か何処かへ行ってしまうという状況でした。日本の新聞紙上では一日数百機の敵機による猛爆撃が行われていると報道されていたラバウルの近海に十二月二十四日到着。今申したとおりその間数度の敵機の爆撃を受け、船団はバラバラに回避行動を執りながら逃げ回り、船倉中の我々は身動き出来ぬ身体、まさに俎の上の鯉、手の施しようもなく、我々は神仏に祈るのみでした。

敵機の跳梁に対抗することが出来ず敵爆撃機の思うままに、思い出されるのは原隊出発の際の言葉「蒲鉾の材料、鮫の餌食」とは、ああこのことだなあ。船の

周りに至近弾を受けましたが、神仏の助けか全船夜間に「ビスマルタ群島」のニューブリテン島「ココボ」にやっとの思いで上陸することが出来ました。

上陸とともに息つく暇もなく、完全軍装のまま暗夜の中を宿舎に向かって行進し、十二月二十五日、歩兵第二二八連隊第二機関銃隊に到着配属されました。この沼部隊（第三十八師団）は支那事变当時は広東省中山地区、香港攻略、インドネシア攻略、ガダルカナル島、ニューブリテン島と、犠牲の多い第三師団管轄の部隊です。部隊要望人員の三倍の兵隊が補充されたことになったが、補充要員部隊はほとんど無傷で到着したわけです。

苦しかった航海、爆撃、暗夜の行軍ではあったが、あの一寸先も見えない中に何万匹とも知れぬ蛍の出現、両側の名も知れぬ大木にぎっしりとクリスマスのイルミネーションを再現したような幻想的な眺めは一忘れれることのできない光景でした。

昭和十九年七月二十五日、混成第三連隊が編成され、第三機関銃中隊に配属「カタカタイ」に移動。これは

我々部隊がほとんど無傷で到着したためにとられた処置（新部隊の編成）と考えられた。

我が公式の軍歴、兵籍は次の通りであります。

昭和十九年三月二十五日～十月三十一日間、

第三次ビスマルク戦参加。

昭和十九年十一月一日～二十年四月十五日間、

第四次ビスマルク戦参加。

その他数々の危難に遭遇し、もう駄目かと思ったことは再三ありましたが、心に残るのは、十九年当初の頃、椰子林の中で宿営していた時、真夜中に近くの我軍の飛行場に敵爆撃機による空襲があった。我が戦闘機が敵爆撃機の上空から空中爆雷（夕弾）を投下し、撃墜したのです。その時私は一人で椰子林の野天便所に座っていたが、その爆雷の破片が私の周囲一面にさまざまの音を立てて突き刺さる。立つに立てず、ここで戦死すれば正に糞死かとい瞬頭をよぎった、笑うに笑えない思いがあります。戦闘機による空中爆雷は相当地果を上げたといえます。

また使用されていない飛行場を連絡用務で二人で進

行中、敵偵察爆撃機（コンソリデーテッド四発爆撃機）一機が三千メートル以上の上空を通過するので空を見上げた途端、ヒュルヒュルと空を切るような音と共に爆弾を投下され、危なく命を落とす破目になるところでした。後で戦友に聞くと、B24は精巧な眼鏡を搭載し、高度の上空から地上の様子が良く見えるという。

昭和二十年八月十五日、終戦の玉音放送はジャングルの中で聴きました。部隊は整列してですが、遙か異国の空で微かな雑音交じりのラジオで聞き断腸の思いと同時に、ああやっと終わったかと思いきや、このことも事実で、心境は複雑でした。

ラバウルにいる時、内地空襲も、沖縄戦況も、広島・長崎の原爆投下も米軍の生無線（暗号でなく）を傍受して聞いていました。テナアンから原爆を載んだB29が飛んだのだが、その前から情報は判った。特殊爆弾を落とすということも、ラバウルで傍受し大本営へ報告していたはずで。

我々は不安感があった。サイパン爆撃の時全部情報があった。だからこれでは勝てないと判ったが、何時

までもつかということだった。だから終戦時の心は複雑だったが、またやっと済んだのかと思いました。

話はさかのぼるが、ニューブリテンに第十七師団（月兵团）もいた。昭和十九年春、沼兵团に帰還命令が出たらしいが船が無く帰国出来なかったという。次に九州の久留米の部隊が来た。それが我々の代わりにズンゲンという所に来て玉砕してしまつた。それも我々にとっては第四の運命の転換で運が良かったことでした。

当時のラバウル周辺の配置や生活状況などを話してみます。陣地だが、ラバウルの司令部等はコンクリートで固めてあり、地下道、地下壕が驚く程造られていた。我々はラバウルより一寸離れた所、谷間に住んでいたが陣地は手掘りのものだった。海岸付近には航空機の無い航空隊や海軍陸戦隊がいたようです。陣地は上空から発見されぬよう谷間にあつた。

病気はマラリアは凄くて随分死んだ。テング熱は少なかったが、脚気もあつた。食料は米、タライモ、タビオカ、椰子の実とかで腹はふくれた。私は昔から粗

食、小食で生活出来るよう訓練したから比較的餓しい思いをしないで済んだのは幸せでした。

ラバウルは日本の陸・海・空の南方第一線の根拠地です。本来なら連合軍は全力を以て、ニューブリテンに上陸攻撃、ラバウルを占領することが予想されます。ラバウルを目指して何故直接に大兵力を上陸させなかったのだろうかと疑問を持っていました。しかし戦後聞いた話ですが、米軍はラバウル攻撃を意図したが「ラバウルの日本軍は三個師団八万ぐらいいる。米軍二十万ぐらいの部隊では日本軍に勝てない」とのスパイからの報告があつたそうです。

そのため米軍はズンゲンへ上陸したが、ジャングルでラバウルの方へ行けない。それで先に申した我々の身代わりになつた久留米の部隊が玉砕してしまつたとのことでした。米軍は空爆で日本軍を攻撃し、牽制しながら、南洋群島攻撃へと向かつて北上し、豪軍が米軍と交替して戦闘をしたというのです。

我々の陣地は谷間で、炊事は煙が空から見えぬよう夜間した。水は谷川のを使うのだが、川の周囲に掘ら

れた便所から谷川に大小便が流れ込む。そのため赤痢になった者も多かった。少ない栄養も血便・粘血便となって一時間に何回も排泄する、体も骨と皮になり死ぬ者もあった。

空襲はロッキード38戦闘爆撃機で、威力があり機関砲弾が当れば出血多量で戦死する。それが超低空でくる。こちらは制空権なく、うっかり射撃すれば我々の場所が発見され、徹底的にやられるので無抵抗、残念だが敵のなすがままでした。

艦砲射撃では海岸の部隊はやられたが、私の所へは来なかった。制空海権なしたが、連合軍は上陸してもジャングルを切り開いて攻めては来なかった。我々はラバウル付近なので海上から上陸された時は危ないのだが、終戦になる直前での戦闘は無く、終戦まで指揮統制はしっかりとれていました。

戦争が終わって振り返って見るに、ニューブリテン島には、各種族の原住民がそれぞれ生活を営んでいるが、真黒いソロモン族から、黒茶色のカナカ族、いずれの種族も温厚な親日家が多かった気がします。特に

白人との混血の女性は十四〜十五歳で素晴らしい肉体の美人が多く見られ、目を楽しませてくれた思い出があります。

果物はあらゆる種類が豊富で、見る物、食べる物、物珍しく、また非常に美味しく、容易に入手出来ることでした。戦争中は食料不足で、それを補うため作物・タロイモ・タピオカ・薩摩芋を自然栽培して収穫していた。

陸稻などは、移動した部隊の旧宿舎を覗いて見ると、こぼれた穂から発芽して陸稻が出来ていたという事例は数多く見ることが出来ました。終戦による米の貯蔵量は大変なものと聞いていたが、帰還の際に持ち帰ったとは聞いていませんでした。

終戦後、一度兵器は全部集められた。しかし、一部で暴動を起こすという噂があり、急遽、豪軍から小銃を渡され自分達で自衛せよとなり、結局引揚げ直前まで小銃を保持していた。

豪軍は婦人兵が多く、下着まで洗われたというが、結構豪軍との関係、使役従事の時はうまくいった

所も多かったと聞きましたが、一方では相当酷い扱いを受けたとも聞いている。しかし、豪州人は欧米人と違って、我々黄色人種に対し、いろいろな意味で開けていたといえよう。私が関係した豪兵では余り悪い人はいなかったような気がします。

帰国復員の情報では、我々ラバウルの部隊は中国の次で、昭和二十六、七年頃、最後だと発表されたと聞いた。しかし、米軍の協力もあり、中国の帰国も進んだし、婦人兵の多いラバウルに男の兵隊を長いこと置くことはいけないので早く戻してくれということ、我々の帰国は中国と同じ位になり、五月から七月頃復員した者が多い。

私は昭和二十一年四月十六日、部隊と一緒にラバウルを出港、浦賀へ上陸の予定でしたが、伝染病が発生したという理由で、急遽予定を変更されました。五月七日、故郷名古屋港上陸、同日召集解除、復員となりました。この日は奇しくも私の誕生日だったので。

しかし、戦死された戦友や、戦犯（無実の人もいた）で残された人のことを思うと胸が痛みます。今村

軍司令官は復員後再度ラバウルに帰り、自ら戦犯として服役した後、帰還されていることを知る人は多いと思います。私は何回かの運命の転機を持って生還出来たことを幸せと思っています。

アッツ島要員が 南方スマトラ勤務

岩手県 小山 信 一

私は東磐井郡の藤沢町で大正十一年五月十七日に生まれました。その後昭和七年宮古町へ移り、そこで呉服の店を出していました。兵隊検査は昭和十七年六月で第二乙種合格、第一補充兵となった昭和十七年徴集兵です。

ところが、昭和十八年一月十八日召集されたが、大東亜戦も戦況が逐次悪化してきたためか現役兵より早く入隊となったのです。私は次男でしたが長兄は死亡していた。しかし両親は健在でしたので後のことは何